

## インターンシップを通じて、学生たちに働く楽しさを伝える

### -社員共育とモノづくり業界の未来を見据えて-

第23回の「泣き笑いシリーズ」のテーマは「インターンシップ」です。インターンシップ制度は、1997年から日本政府による取り組みがスタートし、それから徐々に浸透し、2005年には推計12万人の学生が、この制度を利用していると報告されるまでになったそうです。

学生に対するインターンシップ制度の普及により、職業意識の向上、また職業選択に役立つ経験を得る機会が得られるようになってきたと言われています。



株式会社山田製作所  
代表取締役専務  
山田 雅之  
(大東支部)

今回はインターンシップについて、山田製作所の山田専務に話をしてもらいました。同友会へのかかわりに積極的な山田製作所は、その活動のなかで社員共育と地域社会への貢献の重要性に気づきました。2010年頃、同友会の中で知り合った大学や合同求人出会った高等学校から、インターンシップの要請が来るようになります。社員教育と地域への貢献のため、インターンシップを当然のように受け入れ、毎年どこかの学校とかかわりを持ち続けています。



## 同友会会員へのメッセージ

同友会運動にかかわっていると、共同求人や憲章運動で、学校とのかかわりが出てきます。また、中小企業の社会的責任を考えたとき、学校教育に企業は少しでもかかわるべきだという思いになりました。はじめてインターンシップの依頼があった時は、企業として当然のように受け入れたのですが、実際は日々の業務に追われているなかでの受け入れは、様々な格闘がありました。しかし、毎回インターンシップを終了する日に、学生たちと社員たちが非常に仲良くなり、別れを惜んでいる姿をみると社員の成長と共に、学生が働くことで、少し気づきがあったのだと感じます。これから先、皆さんの会社にインターンシップの依頼があれば、ぜひ受け入れてみてください。社員さんたちが1ランク成長してくれることは間違いありません。いつも、最後の挨拶で「将来、モノづくりの世界に入ってきてほしい」とお願いしています。特にモノづくり企業の方は、このような活動でひとりでも多くのモノづくり屋を作っていくように働きかけましょう。

### 「泣」

インターンシップの受け入れ当初は、まず1日目に経営理念の話をしていましたが、学生はまったくちんぷんかんぷんでした。そのため最近では、まず現場で職場の雰囲気になれてもらうようにし、後半で理念の大切さを話すように変えました。2015年売り手市場といわれている今年、インターンシップの体験中に、就職の話題がでたのですが、山田製作所に就職したいという声がまったくでなかったことは、とても残念に感じました。あと、ツライと感じることは、仕事が忙しいときに社員の手が止まることですね。



### 「笑」

若い社員がインターンシップでの教育を担当しているのですが、社員の成長を非常に感じる事ができます。また、この期間は若い人が増えるので、社内は活性化します。社内で、学生にどのような体験をさせようかと検討していたときに、10cm<sup>3</sup>のサイコロを作ることに決定しました。これは1リットルの容積であり、水なら1kg、鉄なら7.9kgになるということが、社員教育の教材になっています。2012年のインターンシップに、城東工科高校から女生徒(当時2年生)が、体験しに来ました。その女生徒が山田製作所に就職したいと申し出てくれたのです。そして、次の年の就職活動で山田製作所が逆指名し、現在では現場女子として活躍してくれています。これは、当社にとっては、非常に嬉しいことでした。

### 「取材を終えて」

最近、DIYをする女性が多くなっていますが、さらに溶接もしたいという女性も増えているようです。山田製作所では、現在インターンシップをきっかけで入社し、働いている現場女子が活躍していますが、まさに時代にあった人材を確保しています。山田製作所では、はじめての現場女性ということで、社内でもかなり活性化されたく、特に笑顔が可愛い女性なので、仕事場も華やかに変化しています。また近年、山田製作所でのインターンシップの学生に、ものづくり体験だけでなく、営業や展示会にも同行したりと、職場体験をすることもあるらしいのです。このような体験をした学生たちが、社会に出たときに、山田製作所での経験が基盤となり、活躍するのではないかなと感じました。